

■■■ KFCが20年で見られるようになったこと ■■■

2017年2月11日、KFC（特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター）は、結成から20年を迎えることができました。当日のつどいと祝賀会には200名を超える方々にご参加いただき、たくさんのお祝いとお祝辞をいただきました。あらためて感謝申し上げます。

前身の震災ボランティア活動からいままでKFCは、多くの人の支えをうけて事業を進めてきました。紙一枚・鉛筆一本ももたない団体が、多くの会員、支援者、関係者に支えられ、子どもから高齢者まで多くの事業を有給の職員も雇用し展開できるようになりました。

結成からいままで幾度も存続することが難しくなるような危機もありました。ただそれでも危機をのりこえ今まで歩いて来られたのは、人の平等や人権のために必要なことは何かを考え、自分たちが背伸びしてできる精一杯の事業を進めてきたことを多くの人が認めてくれたからだと思えます。

この20年のあゆみのなかで、自らを磨けば必ず道がひらけることは見られるようになりました。これからもKFCは、人が人らしく生きていけるために必要なことを多くの人と進めていきたいと思っています。（理事長 金 宣 吉）

◆「KFC20周年記念のつどい「記念講演会 & シンポジウム」

<第1部> 講演「移民と日本社会」

宮島喬（お茶の水女子大学名誉教授）

ヨーロッパ諸国におけるエスニック・マイノリティと移民研究の第一人者である宮島氏による講演「移民と日本社会」が2月11日ビフレホールで行われました。大変興味深く、説得力のある講演でした。その概要を紹介します。

ヨーロッパには「事実が法になる」という諺がありますが、日本においては“事実が権利につながっていない”のが現状です。日本固有の血統主義、単一民族的社会運営が阻害要因となっています。ヨーロッパで、かつて移民小国と言われていたドイツでは、人口減への危機感から中東欧からの労働者の受け入れを継続し難民にも門戸を開き、2000年には出生地主義国籍法を導入し、現在では移民人口は約1100万人で全人口の約13%を占めており、移民大国となっています。また、フランスも出生地主義の国で国籍取得が容易な施策をとっており、現在、約790万人の移民人口で全人口の約12%を占めています。両国とも、近年の国籍取得件数は年約10万人で、日本の1万人弱とは際だった違いを見せています。また、両国とも、移民第二世代で政治の表舞台で活躍する人が出てきています。

日本では、「成長のため外国人は受け入れる、しかし、移民受け入れと誤解されぬようすべき」という政府閣僚の発言でわかるように、国民も政府も移民には“ノー”の立場となっています。一方、経済界は、高技能者の優遇と“永住者”への容易なアクセスを要求しながら、低賃金不自由労働者の3年ローテーションの維持という矛盾した要求を出しています。国際結婚、日系人労働者、専門・技術・技能外国人の一般永住許可者が年々増加して、現在は約70万人となっているにもかかわらず「日本は移民国ではない」と考え、言い続ける結果、それらの人々を社会的に平等に取り扱う統合政策の極端な遅れとなっており、市民権も十分に保障されていない現状とな

っています。また、近年は、定住外国人の現状・意識も変化しており、ニューカマーで半数が帰国予定のない現状、母国への送金より日本での住宅の取得を考える傾向、第二世代から進んでいる文化のハイブリッド化、第二世代の高校進学希望の増加などがあります。

これから日本も何が変わらなければならないかという、労働者受入れ制度の技能実習生制度の抜本的な改革、外国人学校（民族学校）も含めた学校システムや就学義務化などの多文化教育システムへの改革、国籍法における出生地主義の拡大や生涯重国籍の容認、統合を援けるための外国人や外国出身者の教員・保育士・公務員・医療関係者・政治にかかわる人などの多文化エージェント層の形成などが挙げられます。

反面、ヘイトスピーチなどの移民に対する排斥・嫌外の意識も生まれているが、遅ればせながら2016年にヘイトスピーチ解消法が成立し、法律によってヘイトスピーチが“不当”で“許されない差別的言動”と宣されたことの意義は大きいです。しかし、これはあくまで理念法であり、地方自治体レベルでの取組が求められています。

<第2部>「多（他）文化と生きる」

・パネリスト：

吉井正明（神戸合同法律事務所弁護士）、ハ・ティ・タン・ガ（KFCスタッフ）、呼和徳力根（KFCスタッフ）

・コーディネーター：

野崎志帆（甲南女子大学多文化コミュニケーション学科教授）

・コメンテーター：宮島喬

植民地（台湾）からの移住者である吉井氏からは、自らの差別体験経過を基に外国人の人権を中心に弱者の救済を念頭に弁護士業務を行うようになった経緯・考え方を、ベトナム難民のガ氏からは、様々な経緯で来日し、その後日本で暮らすようになりボランティア活動・在日ベトナム人などの高齢者へのサポートを行うようになった経緯・現状を、また、中国内モンゴルからの留学生であったフフ氏からは、日本の大学院卒業後の外国人高齢者支援への経緯・現状の説明がありました。

外から来た人は、人が助けてくれる場所に居たいという希望があり、多文化共生を進めるためにはそのためのネットワーク・組織作りが必要です。神戸においては、震災が大きな意味を持っており、ヨーロッパでオイルショックで人権重視の意識が高まったのと同じく、それがきっかけとなって、そこで生き残るためのネットワーク作り、助ける側のネットワーク作りが大きく前進したと考えられます。（ニュース係 川淵 啓司）

<祝賀会>

祝賀会にもたくさんの方にお越しいただき、中国残留邦人帰国者の方の演奏やKFCの卒業生のベトナムルーツの高校生の演奏、活動のパネル展示、ベトナム、中国、ブラジル、韓国などの多文化な料理をお楽しみいただきました。

ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆「生活漢字出前講座」に参加して

1月14日に開催された「生活漢字出前講座」に参加しました。14日当日は風の強い時折小雪の舞

う大変寒い日でした。10時から16時までという長丁場でしたが、グループワークなどもあり、有意義な時間を過ごすことができました。

前半は棚田洋平氏による「日本における識字問題とは」というテーマでの話でした。識字率99パーセントの日本における識字問題とは、読み書きに困難を抱える日本人が存在すること、定住外国人、外国にルーツがある子どもたちの存在があるとのことでした。今の日本で学校へ行くことができている中学生が103,000人、小学校を卒業していない人が128,000人もおり、義務教育未修了者が1,000,000人以上もいるとのことでしたが、私はその数字を全く知りませんでした。後半は昼食をはさんで御子神慶子氏による「生活の漢字」についての話と実習（学習体験）でした。「生活の漢字」を考える会では次の3点を大切にしているとのことでした。1. 漢字に興味をもつこと 2. 勉強したいと思えること 3. 続けられること。身のまわりのことばからスタートして、その「ことば」で漢字を勉強する。たとえば、駅、ATMなど日常生活と切り離せないものから始め、楽しんで学習できるようにする。楽しく学習するためのコツも教えてくださいました。「読めるようになることを第一の目標とする」という言葉で、漢字学習支援に対する私の気持ちが少し楽になりました。漢字を覚えるためのヒントとして「漢字のなかのカタカナを見つける」という視点はなるほどと思いました。

その後グループに分かれ、講義室を出て、フロアにある読めたら便利なものを探すことをしました。非常口、立ち入り禁止、厳禁、ご遠慮ください、手洗、現在地など様々な言葉が出てきました。若い方が「無料wifi」を出されたのには、目線の違いを自覚させられました。新たな気持ちで学習支援に向き合おうと思います（石川 明子）

◆書初めと新春パーティ

松の内のにぎわいも過ぎたばかりの1月8日、「書初めと新春パーティ」が行われました。学習者も支援者も、好きな言葉を筆と墨を使って漢字で書くのです。お習字をやったことのある人、ない人、皆半紙を前に気持ちを込めます。鉛筆やペンとは違う柔らかい筆の感触、墨汁の匂い…全く初めての人には難しいかな、と思っていましたが、味のある素敵な「書」が出来上がっていきます。「夢」「元気」「幸せ」「笑顔」等々、明日につながるいい言葉を選んでおられました。何枚か書いたら、1枚（選びきれずに2枚になった人も）選んで台紙にマスキングテープで張ります。

学習スペースで書初めが行われている間にデイサービスセンターハナの会では、元学習者の方々が水餃子を作ってくださいました。

皮から手作りの本格的な水餃子！皆でハナの会へ移動して、水餃子や春巻き、おせちでパーティの始まりです。美味しい料理に舌鼓を打ちながら、普段曜日が違い会うことのなかった学習者、支援者と交流のできる楽しいひととき。

その後、先ほどの書初めを皆に披露、なぜその字を選んだか説明します。そして盛り上がったのが「ダンス講座」。簡単なソーシャルダンスの基礎を教ええていただき、皆でステップを踏んだのですが、これがなかなか難しい。体も気持ちもほぐれて、あちこちで笑い声が上がります。

今年初めて、この「書初め会」に参加したのですが、予想以上の参加者の多さ、賑わいにちょっと驚きました。前半の書初めも後半のパーティも気持ちの良い熱気で、本当に楽しく過ごすことができました。選ばれた漢字には、皆さんの普段の気持ち、大切にしていることや希望が感じられて、言葉のパワーにも触れることができました。1年の始まりに元気を貰うことのできた1日でした。（吉井 朋子）

■■■KFC外国にルーツを持つ子どもの学習支援■■■

◆KFCでの学習支援活動における学びと成長

学習支援活動を通して、私は自分自身の性格や価値観の変化を実感しました。初めてKFCに来た時は、どのように彼らと接するべきか考え悩み緊張していたこと、また、そんな私に子どもは笑顔で歩み寄り、質問攻めにされたことを今でも鮮明に思い出すことができます。

子どもはいつも、見慣れない人が教室に来るとすぐに興味を持って話しかけます。それは、私が彼らを尊敬する一つの理由でもあります。私は中学・高校と彼らとは全く違った環境で育ったため、見知らぬ人に会うと不信感を持ちました。しかし、彼らは日本人だから、女性だからなどとその人を決めつけるのではなく、偏見をもたず相手を知ろうと努力をしていました。日本人でも、よく話す人もいれば大人しい人もいます。背の高い人がいれば低い人もいます。学習支援に関わり彼らと出会ったことで、一人ひとりの個性を認めて向き合っていくことの大切さを教わることができました。

学習支援に参加して約半年が経った頃、小学1年生の女の子と出会いました。彼女と出会ったことで、人と正面から向き合うことの大変さと大切さを学びました。例えば、足し算をする時彼女が指を使って計算するのをためらっていたので、私も指を使って計算をしました。そうして彼女と向き合っていくうちに、少しずつ私に心を開いてくれていることを実感することができました。

日本語が上達していくと反抗的になる部分もありました。彼女の成長に喜びを感じる反面、どう向き合うべきかととても悩みました。目に見える形で成果が実感できないため、自分のしていることが正しいのかと不安でした。しかし、彼女は毎週笑顔で私に会いに来てくれました。今は、本気で怒ったり精いっぱい褒めたりと彼女と正面から向き合って接することができています。

学習支援全体を通して、人生に二度とない経験をすることができたと感じています。KFCでできた繋がりからたくさんの個性に出会い、学ぶことができました。また、私が今、高校・大学に進学して、一般企業に就職することは決して普通ではなく、家族や周りの人や環境に恵まれたことで実現することができたと気づくことができました。KFCで学んだ「出会いの与える力」を、今度は私と出会った人に与えられるような人間に変わりたいと思います。そして、なにより周りの人に感謝する気持ちを忘れず持ち続けたいです。（兵庫県立大学4回生 服部 奈都子）

◆子どもとの関わりで大切なこと

学習支援活動は私にとって本当に貴重な経験となりました。様々な個性を持つ子どもと関わる中で、同情しないことが一番大切だと思いました。「日本語をうまく話せないことがかわいそう、勉強が辛そう」そんなことは当たり前の話であり、同情していたら子どもは前に進めません。KFCに通う子どもは自分の意見をしっかり話すことができます。それは、支援者の方々と子どもとの間に強い信頼関係が築かれているからだと思います。愛情とは、ただ優しく、同情することではありません。子どもと喜びを共有し、何か問題があれば真剣に向き合い、共に解決することで、自然と子どもの心の中に「ここが自分の居場所だ」という気持ちが生まれます。「あなたのため」という気持ちが伝われば、子どもの心に絶対届くことを感じることができました。

活動の中で中学三年生の男の子との出会いが印象に残っています。初めて彼と勉強をした時、反抗期で言うことを聞きませんでした。でも、毎週関わる中で、彼は自己表現が苦手なだけで根は頑張り屋であることが分かりました。何度も突き返されましたが、しつこいほどコミュニケーションをとり、褒めたり叱ったりもしました。何より毎週休まずに学習に来たことを一番に褒めました。彼との出会いのおかげで、私は人と心から向き合うことができたし、彼と信頼関係が築け

たことがとても嬉しかったです。

留学経験からも子どものことを理解することができました。自分の母語ではない世界で意見の半分も伝えられない悔しさ、先生の言っていることが分からない等の経験をしました。でも、周囲の人は自分の気持ちをぶつければ助けてくれたし、親身になって考えてくれました。私は、その小さな勇気を子どもたちに持ってほしいし、その勇気や気持ちを理解する人が必要だと思います。

この経験を経験で終わらせるのではなく、周囲に伝え、継承していく必要があると思います。教育に関する課題は様々ですが、もっと多くの人が、子どもたちを知り、真剣に向きあうことが必要だと思います。「私もっと頑張るね」その一言が本当に嬉しいし、大事にしていく必要があります。こんな素敵な経験をさせてくれたKFCの方々、そして子どもに感謝を伝えたいです。これからも、このような機会があれば積極的に参加して一緒に子どもの未来を考えていきたいです。（兵庫県立大学4回生 鈴木 裕子）

◆ゼミ活動を通じて感じたこと～子どもが生き生き過ごせるために必要なこととは～

2年生の野崎ゼミの活動の一環で、この一年間中学生の学習支援をさせていただきました。今まで子どもに勉強を教える機会がないうえに、相手は外国にルーツを持つ子どもということで、KFCに初めて学習支援に行ったときは適切な勉強法や教え方がまったく分かりませんでした。しかし回数を重ねることで、子どもたち一人ひとりの個性が分かり、個人に合った勉強方法をつかむことができるようになりました。

12月27日に行った「年末お楽しみ会」では、私たちのゼミが企画・運営をし、子どもたちに楽しんでもらいながら日本の文化にも触れてもらおうと、折り紙でのメンコ作りを提案しました。初めてメンコを作る子が多く、自分だけのメンコ作りを楽しむ様子を見てとても嬉しかったです。また、ジェスチャーゲームでは、小学生にゲームのルールを教えてあげるなどサポートしてあげる中学生のしっかりした姿が印象的でした。

KFCの中学生を担当して知ったのは、外国から日本にやってきた子も、日本で生まれた子のどちらも自分の母国が好きだということです。授業では、ベトナムにルーツをもつ女の子が母親と母語で話したがるケースがあると学びましたが、私が担当した生徒は母国のおいしい料理や地域によって異なる方言があることなど嬉しそうに教えてくれ、母国を好きだと話してくれました。母語を話したがる子は、学校で自分のルーツのことで嫌な思いをしているから自分のルーツを知られたくないと感じているのだと思います。そういうことがなければ、外国にルーツをもつ子どももこんなにも生き生きと過ごせるのだと気づきました。そうした原因を作ってしまうのは、まわりの理解が足りないため起きてしまう問題だと考えました。彼らは外国にルーツがあるからこそ、私の知らない文化を知っているし、知らない言葉も話せる。それは、今まさにグローバル化が進む社会の強みでもあると思います。

外国にルーツを持つ子どもたちに学習支援を行うというのは、大学生活のなかで滅多にない機会でした。私が関わりを持った子どもたちにとって、この活動をしたことがなんらかの形で将来の役に立ったのであれば、とても嬉しく思います。

（甲南女子大学多文化コミュニケーション学科 S. M）

■■■ ハナの会 ■■■

◆ハナの会のテト（ベトナム語ではお正月です）

デイサービスセンターハナの会では、多文化な背景を持つ利用者がいるため、行事も多様です。

今年も例年と同じくベトナム出身者が多い木曜日にテト行事をしました。利用者の持っている文化を大切にしたいと今回はテト料理と日本とベトナムのお正月遊びをしました。以下、大学生ボランティアの参加した感想です。

ベトナムのお正月（1月26日（木））の感想

昼食は、お正月仕様であり、ちまき（米）、ほうれん草の浸しなどを食べました。ベトナムでは、ちまきは米だそうです。日本では、お餅ですね。みなさんたくさん食べられており、とても楽しそうでした。

昼食後は、様々な種類のゲームを体験させて貰いました。福笑い、トランプ、すごろくなどをしました。みなさん強過ぎて、景品の飴が何度もなくなるという事件が起きました。驚きました。ゲームは、日本とあまり変わらないと思います。日本では、福笑い、かるた、けん玉、お手玉が主流です。トランプとすごろくは、行事に関係なく、普段のお遊びとして、日本ではされています。始めてベトナムのお正月を体験することができ嬉しく思います。2017年もみなさん、ご健康で！！（京都女子大学 大橋 佳奈）

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆过春节●●●春節を祝う

光陰似箭(光陰矢の如し)、今年的一年もあっという間に過ぎ、また春節がやってきました。

春節を祝う行事は、帰国者たちにとって一年の行事の中でも最も大事な行事の一つです。

中国を離れて20年、30年経っても帰国者たちにとっては、春節は特別な日であることには変わりありません。

中国では、春節になると家族親戚が集まり、最高のごちそうの食卓を囲んで話しの花を咲かせながら大人も子供も楽しい時間を過ごします。また、一年間会えなかった家族、親戚、友人たちにも会い、懐かしい時間を過ごすのも春節です。

帰国者たちは、日本に帰国してからは中国にいる時のように賑やかに春節を祝うことはありませんが、春節になると、懐かしい中国での昔のことを思い出し、また中国にいる家族、友人たちの幸せを祈ります。

今年もKFC新長田帰国者交流会では、「春節を祝う」行事を企画し、何度も事前の打ち合わせを重ね、メニュー、出し物などを決めていきました。

普段の交流会はもちろん、料理教室などのイベントなども帰国者のボランティアリーダーたちが中心に、企画、進行全てを帰国者たち自身が進めていくのがKFC新長田帰国者交流会の伝統です。

何年も交流会に関わったリーダーたちが、交流会を通して育ってきたその能力は感心するほど高いもので、日ごろ素晴らしいリーダーシップを発揮しています。

今年も当日料理担当のメンバーたちは、朝9時に集合し、仕込みと料理作りに汗を流しました。また会場設定担当チーム、出し物担当チームなどに分かれて、それぞれ作業を進めていきました。今年も春節お祝い会は、金理事長の挨拶で始まりました。手作りの料理で囲むお祝い会は、暖かい雰囲気の中で盛り上がりました。

料理作りに参加できなかった高齢の一世の方たち、遠方から来た二世の方たちは、熱熱に茹で上がった水餃子を目の前に、朝早くから準備に関わった皆さんに感謝言葉を惜しまなかったです。帰国者たちの中には、宗教上豚肉を食べない方も何人かいます。その人たちのために交流会では、寿司などを用意して皆さんと共に春節の喜びを分かち合うように配慮しています。

健康上のことで、普段の交流会にはたまにしか参加できない方たちも、中にはこの日には頑張っ

て交流会に来てくれている方もいます。年に一度の特別な日に、自分たちと同じ立場の仲間たちと過ごす時間は、彼らたちにとって普段の寂しさを忘れ、思い存分楽しむ時間となり、新しい一年も元気で頑張ろうと元気付けられます。

帰国者たちは、また毎年このような機会を提供してくれているKFCに心から感謝しています。中国での懐かしい昔話し、最近の中国での新しい話題、日本での話題…尽きない話題に皆さんは花を咲かせながら、皆さんでいただくごちそうに食事はどんどん進みました。

日本に帰国してからは、言葉の壁、文化の違いなどで限られたコミュニティの中で生活している帰国者たちにとって、同じ仲間と一緒に祝う「春節」は格別に楽しく幸せの時間であったに違いないでしょう。

(KFC新長田帰国者交流会担当 福田 淑慧)

■■■ グループホーム・小規模多機能型居宅介護八ナ■■■

◆◆第3回八ナ介護事例発表会～伝えたいもの。私の看護人生～

2月28日にグループホーム八ナで行った事例発表会で山根施設長が発表した内容を紹介します。

はじめに

4月に退職する私の後任に新しい看護師が赴任されると思いますが、看護と介護がうまく連携を取り合えるというのは現状ではまだまだ困難を伴います。お互いの職種がお互いの専門性を認め合いながら、どのようなチームを形成するのかということだと思います。

この3月でグループホーム八ナ、小規模多機能八ナに在職して5年近くが経過します。

看護師という資格を持ち、介護職の人々と一緒になって介護に関わってきました。私がどのような背景の中で看護師になり今日に至ったかを話すこともありかと考え、この機会に話をすることで少しでも今後の参考になればと考えます。

姉の存在が、看護師を目指そうと持った

昭和25年に兵庫県の豊岡に生まれました。3歳離れた姉と5歳下の弟の真ん中で育ちました。

3歳年上の姉は、生まれつき心臓が悪く（先天性心疾患）私が小学生に上がった頃には、しょっちゅう鼻血を出していました。鼻に綿花を詰めると目から血が出てきて、とに角病院受診をしないと止まりませんでした。そのために姉は中学に入るようになってからは、夏休みになると貧血で入院していました。

鼻血は決まって土曜日の夜や祭日の前の晩から始まりました。医療過疎で更に日曜日・祭日となれば診てもらえる医療機関が少なく、母はいつも嘆いていました。

姉は高校を卒業すると、京都大学で心臓の手術ができるようになったからと京大病院

で手術をすることになりました。

両親は、その手術のために、新鮮血が多量に必要（100人分かそれ以上だったと思う）で、その確保に必死で動き回っていました。母曰く「病院に払う治療費よりも、血液確保に使ったお金の方が高かった」と語っていました。私も献血しました。

手術後集中治療室姉に対面した時、目を開けない姉に代わって、モニターを通して聞こえて来た姉の心臓の音が、やけに集中治療室に反響していたことを思い出します。その中で「一人ぐらい医療従事者になってもいいのでは」という気持ちが生まれて来て、私は看護師になりました。

働き続けること

働き続ける事を当たり前的事として受け止めて来ました。高校に入り、民主主義を学び、男女平等意識にますます磨きが加わり、女性であっても働き続ける女性であろうと思っていました。その考えから、看護師を選択したことでより矛盾は無くなっていました。

私の結婚観は、働き続ける事を受け止める男性でした。共働きをしながら子育てをすることは決して楽ではありませんが、私自身「生きることは、楽な事ではない。楽をしたいとは思わない」という考えに立ちます。

人間は社会的動物なので、働くということは、仕事を通して社会参加に関わっていると思っています。そして、もう数年働こうと思っています。

支援が私にとっての研修場

24歳で看護師免許を取り、再び神戸の病院では働くことになりました。3月に卒業し5月には外科病棟オープンに向けての責任者となりました。同じ50年卒であっても他のメンバーは新入職員として研修を受けているのに、私は研修を保障する側でした。どこで自分の研修をするか、それは体制不足のための応援（OP室、透析室勤務、夜勤不足の穴埋め要員）が自分の研修場であると考え、やってきました。

振り返ると専門性をきわめることはできなかったけれど、「看護は土着性である」という考えのもとに、今日までやってきたように思います。

支援を通して身につけたことは、フットワークを軽くするという事です。

医師から学び、看護師業務を振り返った

准看護師として働きながら看護師の学校に通いました（こういうケースを進学コースと呼ぶ）。

友人から誘われて秋田にある看護学校に入学しました。秋田は私の青春時代そのものです。働きながら夜看護学校で学ぶ。新しい職場では、医学部を卒業した研修医と一緒にした。このことがのちほどの看護師人生に医師との対等な関係作りを生む土壌となっていていっています。

最初は何もできない1年目の研修医が2年目になると、看護師である私たちに教えてくれます。「この違いは何なんだ」とよく思いました。一つには医師は一人で患者を診、その中で判断をくだし、そして治療の責任をとっていくというプロセスを経て、急激に成長していくのだろうと。しかし、看護師はチームで動くので、24時間責任を取らなくても済む事が多いです。職種は違っていても、医師とは対等でありたいという気持ちから、優秀な看護師になりたい。医師と同格にやり合っていける看護の力量を身につけたいと思って来ました。

職場は研究の宝庫である

- ・日常の業務に流されるのではなく、日常の中から疑問、ひらめきからまとめる事を積み重ねる。

- ・現場が一番先をいっている。それは何かを掴むこと。

友人だった研修医から言われた言葉で「優秀な看護師さんは、物事に対して、予測を立てて動くので、無駄がない。仕事の出来ない看護師さんは動線が長い（忘れ物が多い）」が今も頭に残っています。

祖母の教え

私の祖母は苦勞人でしたが、粹でかっこよかったです。

小学生の頃に祖母から言われた言葉で「人間は手と足と目と耳がある。それを使えば何でもで

きる」。人間の自立を教えられました。

終わりに

自己啓発の出来る人間が求められていると言いたいです。そこには自立が問われます。

職場の中でケースカンファレンスをし、ケースをまとめ、そこから法則を見つける職場であり、その職場を支える一員になってほしいと思っています。（山根 香代子）

◆神戸市介護保険コミュニケーション・サポート事業 サポーター養成研修参加

神戸市では、日本語での意思疎通困難な方が介護保険制度を利用されるにあたり、通訳（コミュニケーション・サポーター。以下サポーター）を派遣する、コミュニケーション・サポート事業を2006年から実施しています。この事業は弊法人を含む、在日外国人支援3団体の要望で、先行自治体の制度を参考にして創設されたものです。通訳派遣等の実際の業務は、2017年1月現在、下記の4つの支援団体に委託されています。

派遣されるサポーターについては、神戸市介護保険課が実施する90分の研修を受講し、通訳言語に応じて各支援団体に登録後、介護保険の要介護認定調査やケアプラン作成時等に同席し、通訳を行います。

これまで弊法人でもサポーター養成研修を複数回実施してきましたが、今回は下記委託団体の内、関西ブラジル人コミュニティ（以下CBK）がポルトガル語のサポーター養成研修を実施されるとのことで、弊法人からも、朝鮮・韓国語、中国語のサポーター養成を便乗させていただきました。

CBKは南米日系人・在日ブラジル人を中心とした在住外国人の支援事業等を実施されているNPO法人ですが、詳細はHP (<http://kobe-cbk.server-shared.com>) をご参照下さい。

CBKのスタッフの方のお話では、日常のコミュニケーション手段がポルトガル語の高齢者の方からの相談（介護保険に関する手続き等を含む）が年に2～3件程度あり、対応に備えて今回の研修を開催されたとのことでした。

2017年1月27日（金）14:00～15:30、神戸市立海外移住と文化の交流センターで研修は行われ、参加者はポルトガル語サポーター3名、朝鮮・韓国語サポーター1名、中国語サポーター1名、CBK及び弊法人の事務担当各1名、講師は神戸市介護保険課からの3名でした。内容は、

（1）サポーター業務の概要、（2）介護保険の概要、（3）派遣先での心構え、（4）認定調査・ケアプランの内容、（5）質疑応答、でした。

本事業のサポーター派遣に伴う利用者（介護保険を利用される方）の費用負担はなく、1人につき、年に4回まで利用することができます。利用を希望される時は、各支援団体、または神戸市介護保険課に申し込みをします。下記に各支援団体の連絡先を挙げておきますので、身近で介護等に関して通訳を必要とされる方がおられましたらご活用下さい。

コミュニケーション・サポート事業は通訳派遣・サポーター養成だけでなく、介護保険啓発チラシの多言語版作成や、利用者に対する介護保険説明会（各言語にて）等も行っています。言葉や情報の壁の為に制度を利用することができず、必要な日常生活支援が得られないという状況が改善できるよう、今後も本事業の実効的な運用に努めたいと考えています。（吉本 直子）

* 支援団体・派遣団体

NPO法人 関西ブラジル人コミュニティ
（ポルトガル語）：078-222-5350

ベトナム夢KOBÉ（ベトナム語）：

078-736-2987

NPO法人 多言語センターFACIL

（中国語）：078-736-3040

NPO法人 神戸定住外国人支援センター（朝鮮・韓国語、中国語、ベトナム語）：

078-612-2402

■■■ 今後の予定 ■■■

■ KFC帰国者新長田交流会

3月21日(火) 映画鑑賞会

■ 多文化子ども共育センター

3月12日(日) 10:00~12:00

WAM助成事業報告会

「これからの青年・子どもにとって必要なこと」

於 渋谷生涯学習センター(IKOZA304講習室)

3月25日(土) 14:00~16:00

WAM助成事業報告会

「これからの青年・子どもにとって必要なこと」

於 新長田勤労市民センター別館ピフレホール会議室A